

AV JOURNAL

1988年3月 第13号



〈デジジョンルームにて〉

目 次

“外大における外国語授業について”	
外国人教師による座談会(第4回).....	2
「名古屋大学総合言語センター」訪問記.....	野村 泰幸 8
私説『視覚映像文化論』その2.....	林田 雅至 11
〈出版物案内〉.....	15
編集後記.....	15

大阪外国語大学

“外大における外国語授業について”

外国人教師による座談会 第4回

(1988年2月18日)

出席者

盧 暁 逸 (中国語)
アクソーンポン, ウォーラナン (タイ語)
アブー・ゼード,
ナスル・ハーメド・リズク (アラビア語)
ヴォルダリング, グイド (ドイツ語)
メラー・アナセン, ニナ (デンマーク語)
ゲーラ, マルコ・アントニオ (ポルトガル語)

通 訳

上 野 義 和 (英 語)
加 藤 正 治 (英 語)
深 尾 葉 子 (中国語)
宮本 マラシー・セーンニコン (タイ語)
視聴覚教育委員会委員
乙 政 潤 (ドイツ語)
橋 本 勝 (モンゴル語)
郡 史 郎 (イタリア語)
上 神 忠 彦 (中国語)

LLでの授業を担当されている外国人の先生方をお招きして外国語教育上の話題についてご意見を伺う「外国人教師座談会」は、もうLLの年中行事の一つとして定着した観がある。本年の座談会で第4回目を迎え、今回でもっておよそお願いできる限りの外国人教師の方々をお招きしたつもりである。もっとも、今回もご都合でお願いできなかった先生もおられるし、今回お招きするよりも前にすでに帰国された先生もあるので、この座談会はいつまで回を重ねても完結することはないとも言えよう。

今回も、これまでの例に習い、小テーマを4つ用意して、順次それらについて話していただく計画で座談会を始めたが、「何に重点をおいて教えるか」について話し合っていくうちに、「文法」の位置づけをめぐる議論が沸き、後半は端折らざるを得なかった。けれども、この議論のおかげで、各先生の考える「文法」の内容が異なっていることが明らかとなり、そのことはたいへん有意義であった。まさに話し合うことは大切なことで、このような結果は座談が行われたればこそ得られたと言えよう。

また、「外大は快適なコミュニティではあるが、連絡文書が日本語なのは不便だ。」とのアブー・ゼード先生のコメントは、ついでに述べられたものではあったけれども、私達にとって頂門の一針であった。私達は外国語によるコミュニケーションを教えることに従事しながら、自分達の日常において外国人のお客とのコミュニケーションを案外おろそかにしていることが図らずも明らかになったからである。これもまた座談会に帰されるべき功であると見えようか。

司 会： それでは只今より外国人教師によるAV座談会を始めさせていただきます。

本日はお忙しい中をお越し下さってありがとうございます。私は視聴覚委員会の委員長の乙政です。本日の司会をさせていただきます。それでは始めさせていただきます。日本語の発言は英語に、英語の発言は日本語に翻訳されます。語科の教官においでいただいているところは、その言語で発言していただいで結構です。

出席者紹介 (略)

通訳者紹介 (略)

そしてカメラマンは図書館の青山さんです。また、今日の座談会の記録は委員会と視聴覚資料係が合同で編集しております『AVジャーナル』に収録されます。

皆様のお手許に過去6冊のバックナンバーをさしあげましたが、同じような座談会の記録が7・9・11号に載っております。本日はテーマを4つ用意致しました。

- 1) どのように教えていますか？
- 2) 授業の目標はなんですか？
- 3) 日本人の同僚と協力なさっていますか？
- 4) 学科のカリキュラムとの関連はどうですか？

以上について、各先生方がどのようにして教えていらっしゃるかお伺いしたいと思います。皮切りに、すでに一度おいで下さったことがおありのアナセン先生お願い致します。

アナセン： 私が強調していることは、コミュニケーションとダイアログということです。

このようにラウンド・テーブル方式で学生を座らせて教えています。ちょうど卓球をしているように、学生同士に対話させるのです。私の経験上この方式は非常によいと思います。というのは学生がお互いに顔を見ながらコミュニケーション出来るからです。そして、なるべく楽しいクラスにしようと心掛けています。



司 会： ありがとうございます。アクソーンポン先生はいかがでしょう。

アクソーンポン： 私もアナセン先生と同じようなやり方をとっています。教えているのは言語、文学、文化で、言語では主に会話を教えています。また視聴覚の機器、設備をできるだけ使うようにしています。たとえばビデオテープ、カセットテープ、スライドです。そして、今よく使っているのがOHPです。

司 会： ヴォルダリング先生いかがですか。

ヴォルダリング： 私は日本に来たばかりで、教えるという経験も少ないのですが授業をやる際に第一に考えていることは、学生達を大人としてみなすことです。そして学生達とのコミュニケーションを大事にしています。

司 会： ゲーラ先生どうぞ。

ゲーラ： 私は会話とポルトガル語の作文、ブラジルの文化を教えています。そして、授業中はなるべくナチュラルに学生と会話するようにしています。これは学生にとってかなり厳しいようです。教材として主に使っているものはテープ、音楽、新聞、雑誌などです。そして、時には学生達にポルトガル語で自分自身のことについて話させます。といいますのは、私は日本語がわかりませんから、学生の話すのを聞いてはじめて学生達についても日本の事情についても理解できるわけですし、学生達はポルトガル語の表現になれるのですから、お互いに勉強になると思うからです。

司 会： それでは盧先生ご発言をお願い致します。

盧： 私は主に会話を教えています。つまり学生が聞くことと喋ることを覚えるのを助けるのが私の仕事です。日本の学生の特徴として読む力はあると思いますが、聞き取る力、話す力は比較的弱いと思います。そして、聞いてもわからない喋ることも出来ないが黒板に書けばわかるということがよくあります。そこで、私は黒板になるべく書かないという方法をとっています。始めた時は学生は、これになじめないようでじっくりこない様子でした。

学生達の聞く力と話す力を伸ばすためには学生達と一緒に朗読するということが大事だと思います。中国語の場合、語音も声調も難しいのですが、それ以上に語調が難しく、特に語調について書かれた教科書は無いので学生と朗読するというのをなるべく注意してやっています。

日本に居て中国語を勉強するというのは環境としては決してよいとはいえませ

ん。学生はその教室を出るともう話す機会がないわけですから。

そこで授業のときに私は自分が話す時間は、どんなに多くても30%か20%くらいに止めて、70%~80%は学生に話させ、練習させるようにしています。

もう一つ注意しているのは、教材に主に現在の民俗、風習、国情を如実に表しているようなものを取り上げることで、語学を学ぶにあたっては文化面も理解していなければいけません。また上級生には中国の古典に関するものを扱うようにして、古いものを読むことでその中で現在の会話に生かされている言葉の理解を深めようとしています。私の教えている内容は全て聞く力と話す力を伸ばすことに集約されます。なんとかして学生達に口を開かせて自分から話をするようにしようとしています。

日本の学生というのは口を開いて話すことをとても億劫がり、あまり好まないものでいつもなんとかして話させようとしています。

司 会： 先生方がお教えになる際に特に留意なさっている点もぜひお話いただきたいと思いますが、今度はアブー・ゼード先生にお伺い致します。

アブーゼード： アラビア語を教える時に一番大きな問題になるのがアラビア語には沢山の方言があるということです。しかも、一つの国の中にも沢山の方言があるということです。ですからその内のどれか一つをとって学生に教えるということをしてあまり意味のないことなので、私がつけている方法は標準化されたアラビア語というものを教えるということです。そのため教える際に使うテキストの選択に注意を払っています。1年生の時には、特に耳で聞いて正しく聞き取るということに主眼をおいています。文の意味とかは二の次にしておいてなるべく口頭でリピートさせ、私も一緒に発音しています。そして、文の意味などの説明をする時以



外は英語は使わず、極力アラビア語で話すようにしています。2年生になると、テキストを使って作文させるということに力をいれています。時には短い簡単な小説を使うこともあります。3年生になるとアラビアの文化と文学を教えます。文化に関しては時として英語で教えることもあります。

文学に関してはアラビア語の言語構造の分析などの言語学的なことに主眼をおいています。

司 会： 教えられるときの留意点ということでは、特にアナセン先生が、ご主張をお持ちのようです。

アナセン： 外国語を教える時にたいへん重要なことは、私が外国語を習った時の経験から言えば、その言葉を聞いて直ちに理解するということです。要するにその言葉が話されている国へ行ってその国の人が喋っている言葉がさっぱりわからない、つまり生の言葉がわからないということでは困るのです。ですからテープなどを使って学生達に生の言葉にふれさせることが大切だと思います。

司 会： お教えになる先生の言語観にかかわってくる問題ですね。

ゲ ー ラ： どのような言語であってもそこには一つのユニバースが形成されていると思います。言葉を理解するという事は機械的に意味を自国語に置き換えるというのではなくて一つのユニバースを理解することだと思います。そのような態度を学

生達に教えて、彼らが生の言葉に接した場合に戸惑わないようにしたいと思っています。

ヴォルダリング： 私の意見はゲーラ先生とは全く逆なんです。先ず大切なのは文法を理解することだと思います。ゲーラ先生は文法というのは非常にメカニカルなことだとおっしゃいましたが、私はそのように感じません。ただ、文法は語の中心だといっても、文章の構造が一つ一つの単語の意味より大事だという意味ではありません。日本語とドイツ語を比較した場合に日本語の方はドイツ語に比べてかなり動詞が多いのですが、ドイツ語の方は名詞を使った表現が多いと思います。それで、動詞にかかわってくるのは時間(テンス)なので、時間のとらえ方がドイツ語と日本語では違っているということなのですが、それは文法を通じてでないといけないのではないかと思うのです。

この意味で、学んでいる外国語の文法を理解することはとても大切だと申したのです。

司 会： ゲーラ先生、今の意見に対していかがでしょうか。

ゲ ー ラ： ある点においてはヴォルダリング先生に賛成できるのですが、学生達は機械的に翻訳するという事に慣れているようなのです。ですから、学生達は戸惑うかと思うのですが、一番よいのは対応する場面を思い浮かべてみて、その場合の日本語に翻訳をするという過程のなかに文法的説明を組み入れて教授することではないかと思います。

司 会： アナセン先生どうぞ。

アナセン： 私がドイツ語を学んだ印象ですが文法は難しいと思いました。

アブーゼード： ドイツ語はアラビア語と同じくらい難しいと思います。外国語を母国語に置き換えて理解しようとするにはある程度しかたがないと思います。しかしある外国の文化と言語というのを一つのまとまりとして学ぶのがよいと思います。そし

てその国の文化に関する事柄を扱ったものを読む事が大切だと思います。アラビア語は長い歴史をもった言語であり、一つの単語の意味にしても随分と歴史をさかのぼらなくてはわからないものがあり、日本で使われているアラビア語の辞書を使ってもわからない場合があり、文脈で判断しなければならないときがあります。そういう点ではメカニクにはいけないと思います。

司 会： アクソーンポン先生この点についてどのようにお考えでしょうか。

アクソーンポン： 文法は言語の一番大切なことだと考えています。最初に日本に来たときは、外大で教えているタイ語はあまり気に入っていませんでした。何故なら学生は文法的な基礎がわかっていないようでした。タイ語はイントネーションによって意味が異なりますので文法を理解することはイントネーションがわかることであると考えています。タイ語を教えるときに一番問題になるのが、このイントネーションの違いが文法化されていることで、その文法がわからないためにタイ語がよくわからないという点だと思います。たとえばタイ語では「サン」という言葉と「サン」という言葉はイントネーションによって意味が随分変わるので。この違い(表記不能)を文法としてわかっていなかったらイントネーションの違いも聞き逃してしまいます。このような事を理解しないと、タイ語を話せませんし、おしま



いにはタイ語も書けなくなります。私が一生懸命やりたいと思っていることは、1回生と2回生ではこのような文法を一生懸命教えることで、少なくともタイの小学校の1年生から4年生までのレベルの文法を教えたいと思っています。もちろん、会話だけを強調してはいけなと思いますし、読み書きがよくできるための文法も強調しなければいけないと思います。

司 会： 盧先生はさきほどの、ご発言にまだ何かご説明を付け加えになりたいようですね。

盧： もう一言だけ言わせてもらいます。二つの異なる言語の間にはかなり大きな、ときには相当大きな差異があると思います。たとえば日本では、朝会ったときに、「おはよう」と言いますし、英語で“Good morning”と言うことはオーストラリアに行ってもイギリスに行ってもアメリカに行っても聞けると思っています。中国語でもテキストの第1巻には、まず最初に「ニイハオ」というのがでてきます。でも中国に行ってみるとこの「ニイハオ」という言葉を聞くことはほとんどありません。中国人はお互い面と向かって会った時に「ニイハオ」と言うことはあり得ないのです。

だから学生達に教える時にまず中国人は中国人同士出会ったときには「ニイハオ」とは言わない、「ニイハオ」とは言わずにどう言うかということをお教えしなければならぬのです。

もう一つ強調したいのは、言葉の意味に表向きの意味とその裏の意味の二つがある場合があるということです。たとえば、文法的にはその違いは決して現れないけれども、使われる文脈の中では表向きの意味とその裏の意味が全く違う場合です。「ニイチェンシン」という言葉は表向きの意味としては、「あなたは本当にやり手ですね」とか「よく出来ますね」と訳され、逐語にはそういう意味にしかとれないのですが、その裏ではもう一つ別に「なんて馬鹿な事をしてくれたんだ」

ということを表すときもあるのです。こういったことから、やはり決まった言い回しというものはもう一つの裏の意味を理解することが常に重要であると考えます。そういうことに対して2年生から注意を向けさせています。とくにその頃から使い方の違いを見逃すために間違いがよく起こるからです。

アプーゼード： その二つにはイントネーションの違いはあるのですか。

盧： イントネーションの違いも文法の違いも全然ありません。

司 会： 普通はシチュエーションでわかるのですか。

盧： やはりその言葉の前後と状況によってわかります。このようなことはどの国の言葉にもあると思うのですが。

橋 本： それは皮肉のような場合に使われるのですか。

盧： はい。ですから、中国人もときにはどちらの意味ですかと聞くことがあります。

橋 本： すると、その皮肉がわからない人もいるのですね。

盧： ええ。でも中国人で表向きの意味を理解しない人はいないと思います。

ともかく私が強調したいと思っているのは、文法も大事なのですが、文法以外にも何かそれと同等に大切なもの、又それよりも大事なものがあるということです。外国人教師の任務としては自然な実態に則した言葉を伝えてやるのがとても大事だと思うのですが、教科書というのは往々にしてそういう実態から離れているので、出来る限り普通の生活の場面で使われる姿を伝えるということが外国人教師にしかできない重要な事だと思えます。日本人の教師は文法についてはかなりの確に説明できると思うのですが、やはり社会背景であるとか風俗、習慣とかいったものは外国人教師にしか伝えられないのではないかと思います。一つの例をあげますと、中国の文化大革命の時期の作品を読むのに文法的な面からだけ

読むと非常に大きな誤解をしてしまい、やはりその背景を深く理解していないと真の意味を伝えることが出来ないと思います。

司 会： 皆さん、このあと先生方の語科の授業全体のなかでの位置づけを話していただく予定にしておりましたが、予定の時間が残り少なくなりました。司会者としてはこのテーマは諦めまして、最後に各先生から、語科の日本人の同僚の先生との協力について簡単に話していただきましょう。また、しめくくりの一言をおっしゃってくださって結構です。ゲーラ先生からお願い致します。

ゲーラ： 私の語科の他の先生方との関係は非常にスムーズにっており、お互いに教えることあり教えられることもありというよい環境におかれています。外大の授業においての外国人教師の役割は言葉の教育という事も含まれるのですが、その他にもっと広い教育の面での可能性があると思います。

司 会： それではアブー・ゼード先生お願い致します。

アブー・ゼード： 私もゲーラ先生と同じ意見です。日本とそれぞれの国の文化が、お互いに理解できるという点でこの大学は、よいコミュニティをつくっていると思います。ただし、関連して言わせていただきますと、大学に対しての注文なのですが、私に來る通知文書が全て日本語で書かれていて、そのつど同僚の先生に尋ねなければならぬので困ります。同僚の先生方は非常に協力的で、いろいろと手助けして下さいまして、ありがたく思っています。

司 会： アクソーンポン先生一言お願いします。

アクソーンポン： タイ語学科では教師がいつも集まって学生達の事について意見の交換をします。先生方は心が広くお互いに対して協調的ですし、私に対してもよく協力して下さいと思います。

司 会： 盧先生、一言どうぞ。

盧： 今日はこの会に出席させていただきま

してありがとうございます。もともと参加したいと思っていなくて、来ても聞くだけであまり喋るのはよそうと思って、口実として耳は持ってきたが口は忘れてきたと言おうと思っていたのですが、お昼御飯をいただいてしまったので口を忘れてきたとは言えなくなってしまいました。やはり来てみて、これは情報交流のために本当によい場だと思いました。中国語学科の先生方とうまくいっていますし、研究の進展についてもお互いに交流しあっています。また、同僚の先生方の親切に、たいへん感謝しております。

司 会： アナセン先生いかがですか。

アナセン： 文化の相互理解ということについては、アブー・ゼード先生とほとんど同じ意見です。ここで3年間教えて今年帰国する予定です。外国語の勉強だけではないのですが、学習する際に一番重要なのは、自分自身を解放するという事だと思えます。

デンマーク語学科の他の先生方とはよい関係にあると思います。先生方がそれぞれ専門とされているのがデンマーク語ですから、デンマークに対して知識をお持ちなので、私としては非常にやりやすいのです。最後にLLの方々、たいへん良くして下さいましてうれしく思っています。

司 会： ヴォルダリング先生どうぞ。

ヴォルダリング： いままで出た意見にほとんど賛成します。それから同僚の先生方に関しましては非常に素晴らしい方々ばかりで、私が



困っているときには進んで手をさしのべて下さいます。この場に招かれましていろいろな意見の交換ができてうれしく思っています。

次回もお招きがあれば、ぜひまた出席したいと思います。

司 会： 皆様お忙しい中、本日はわざわざおいで下さり、貴重なご意見をいろいろとありがとうございました。先に申しあげましたように、本日の座談会は、やがて『AVジャーナル』に掲載されます。出来上がりましたら、お届け致します。

「名古屋大学総合言語センター」訪問記

ドイツ語学科 野村 泰幸

過日、名古屋大学総合言語センターを訪問する機会に恵まれたので、簡単ではあるが、その印象を綴りながら、視聴覚教育について思い付くところを述べたいと思う。

訪問先の「総合言語センター」は、その前身である「言語センター」が1974年4月に設立されている。名古屋大学は筆者の Alma mater であるが、ちょうどこの月に筆者は本学に赴任することとなり、以来筆者にとっては未知の研究・教育施設であった。建物は教養部の隣に位置しており、その意味でも一紛争世代の人なら分かって頂けるだろうか？—微妙ななつかしさと共に、一瞬のうちに—と言っても、けっして大げさにはならないだろう—過ぎ去りし年月をも微かに味わうことになった。と、思い入れはともかくとしまして、この「言語センター」は、5年後の1979年4月には教養部の外国語系列を統合し、さらに同年10月には主として研究留学生を対象とした日本語研修コースが開設され、続いて2年後の1981年10月には日本研究志望者を対象とする日本語・日本文化研修コースが開設され、現在のような「総合言語センター」として今日に至っている。したがって、留学生別科を有する本学のような大学とはいくらか似ていながら、しかし、専ら教養課程における外国語授業をとくに視聴覚機器を用いて行うための教育施設というのではなく、後でも述べるように、複数学部にもわたる全学向け授業をも開設し、また独立の予算に基づき、独自の研究・教育スタッフや職員をも擁した施設であるという点で、組織を異にしていると言って良いだろう。

管理・運営組織の詳細は別の機会に譲るとして、

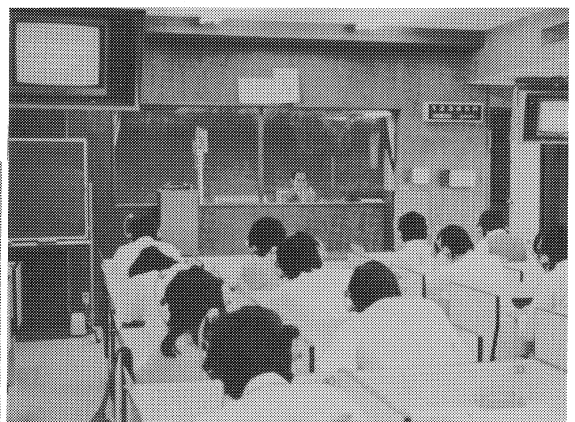
差し当たり本学の視聴覚設備との比較を念頭に置きつつ見聞を述べると、筆者にとって興味深く思われたのは、最も新しい設備ということで案内して頂いたスタジオの利用であろうか。たとえば、大学院生が論文をまとめるにあたり、ビデオ機器を利用して映像記録を作成し、添付資料とする。あるいは、教養課程の学生達が外国語で寸劇を演じて、その様子をビデオに録り、それを教材として互いに批評しあうと言った具合である。筆者も「センター」のご厚意でそのような録画記録を見せて頂いたが、ドイツ人教師の指導のもとで多分二年生であろうか、テーブルや衣装といったごく簡単な小道具を準備して二～四、五人が一つのグループとなり、少しばかり気分を出して、なかには照れながら、会話を交わし、演技している様子が面白いと感じられた。3台のカラー・カメラも設置しており、同じスタジオ内にドイツ人教師もいて、メモ、あるいはチェックしている様子も差し込み画像としてテレビ画面に映し出されている。授業の目標は、会話による基本的な表現能力の養成にあるのだろうと推測された。小人数クラスであり、受講希望者が多いときには抽選をすることである。ところでこれは筆者の偏見か、見るところ男子学生の方がフニャフニャして少し頼りないのに対して、女子学生の方は概してその気になって演技している。ドイツ語専攻の受講生たちではないとのことで、表現や発音には初歩的なミスも見受けられるが、積極的に一つの場面を作り上げようとしている雰囲気を感じられ、実際の授業の様子が窺われるような内容であった。

視聴覚授業というと、いきおいカセットやビデオ

オ、レコードなどの AV 機器を使用したメッセージの送信・受信による授業というイメージを思い浮かべる。それは、外国語授業の、本来多面的な性質を有する筈の教材というソフトを最も統合しやすいという点で、多様な授業形態のうちでも最も有効なものであり、さらに、個々のブースのなかで、自分自身の能力に応じてペースをコントロールしながら練習を重ねることもできるという点で独自の利点を持つ。しかし、こうした録画記録を見ながら感じたことは、外国語・外国文学、あるいは外国文化を専攻とはしない—したがって、外国語習得に明確なモチベーションが欠けるのも自然だろう—学生達に、しかも「教養」という言葉が内実を失って既に久しい、ほかならぬ現代の学生達に—より正確に述べれば—学生達と外国語を学ぶことの楽しさを共有するための手段そのものが、いま問われているのかも知れない、ということであった。本学のように、外国語学部のもとで一年次から専攻語科に属し、比較的体系だてて専攻外国語を学ぶという環境のなかからは、学生のみならず、教師にも改めて意識されることはなかったかも知れないが、外国語の、とりわけ習得段階における「言葉」とは、規則化された言語記号の連鎖ではなく、つまるところ音声と身振りを伴うコミュニケーションそのものにほかならないのではないだろうか？ もっとも、これが正しいとしても、これが授業形態の在り方をすべて規定する必要はない。しかし、〈私ハ学生デス—アナタハナンドスカ？〉を、人ならぬ、テキストに向かってせいぜい音読してコト足レリとするならば、外国語を習得する充実感が湧いてくる方が不思議というもの

だろう。筆者自身、大学では一羅・希語の古典語は別として、単位の関係上やむを得ず—英・独・佛語の外国語授業を経巡ったが、一度として「コトバとは何か？」、「コトバを習得するとはどういうことか？」が語られなかったように記憶している。多分、そういう時代だったのであろう。

「知識」として外国語を学んできたのは筆者とて例外ではなく、その意義は否定しようもないが、いわゆる「教養課程」における外国語授業が極めてシヴィルな状況に置かれているのを考えると、「知識」としてのみ学んできたことの、いわば先代からの借金は耳を揃えて払いたくなくとも言うものである。もっともこれは、じつは意識の問題ではなく、スタッフと設備の、したがって政策に関わる問題であろう。事実、机や椅子の乱雑極まりない教室で、(筆者も含めて) 少しばかり発音の怪しげな教師が、ただですら自己表現の不得手な日本人学生に向かって、外国語で寸劇を演じて楽しんでみる、と言ったところでなんの益するところがあるだろうか。あくまでTV局のスタジオよろしく、スポット・ライトの一つも浴び、ネイティブ・スピーカのチェックもなんのその、周りで見ている仲間達に「パフォーマンスだぜい！」と声をかけたくくなるような雰囲気具备了設備があっても無駄にはならないだろう。—外国語習得の効果を叫ぶならば、である。因に、今回案内の労をとって頂いた小坂光一氏のお話では、「センター」のスタジオはくやや使い過ぎ」との由であるが、まさに



〈名古屋大学総合言語センター〉

そうあるべきかも知れない。本学にもこのような設備があることは、語劇の撮影・録画を通じてご存じの学生諸君もおいででしょう？

ところで「総合言語センター」は教養部棟にも一部互っているが、主機能は4階建ての専用1棟内部で満たされているようである。視聴覚教育設備としては、先に触れたスタジオのほかにLL教室が6教室、個人LL学修室が1室、演習室が5室あるが、教育・研究用としては、共同研究室・図書室のほかに教材作成室や録音室、音声実験室が備えられており、パーソナル・コンピューターによる教材開発も進められ、日本語では一部プログラムが稼働しているとのことである。時間の都合で、テープやビデオといった教材ソフトについて詳しいお話が伺えなかったのはやや心残りであった。なお、研究・教育組織とその規模、学生数は次の表が示している通りであり、「応用言語科学部」、「地域言語文化部」、「比較言語文化部」の三つの研究組織と、それらに属する教育組織として「英語学科」、「ドイツ語学科」、「フランス語学科」、「ロシア語学科」、「中国語学科」、「日本語学科」がある。授業は教養部の教官と連携して

現 員

(昭和61年9月1日現在)

部	部 門	教 授	助 教 授	講 師	助 手	計
応用言語科学部	応用言語部門	1	1			2
	英語部門	1	2	1		4
	ドイツ語部門	1	2			3
	フランス語部門	1	1			2
	ロシア語部門	1	1			2
	中国語部門	1		1		2
	日本語部門	1				1
地域言語部	地域言語文化部門	2	2			4
	英語部門	4	3	1		8
	ドイツ語部門	3	3	1		7
	フランス語部門	2				2
比較言語部	比較言語文化部門	1	2	1		4
	英語部門	3	2	1		6
	ドイツ語部門	3	3			6
	フランス語部門	1	1			2
小 計		26	23	6		55
日本語研修コース		1	2			3
L L					1	1
留学生担当					1	1
合 計		27	25	6	2	60

外国人教師

英語	3	ドイツ語	3	フランス語	1	中国語	1
----	---	------	---	-------	---	-----	---

学 生 数

(昭和61年9月1日現在)

区分	年度	54	55	56	57	58	59	60	61
		前期		8 (1) (8)	13 (3) (13)	12 (1) (12)	11 (2) (11)	7 (1) (7)	17 (3) (17)
日本語 研修コース	後期	2 (1) (7)	7 (3) (10)	10 (3) (10)	19 (7) (19)	14 (4) (14)	17 (6) (17)	26 (9) (26)	
	前期		8 (5) (8)	9 (5) (9)	13 (10) (13)	16 (6) (16)	18 (9) (18)		
日本語・日本文化 研修コース									
総合言語センター 研究 生	前期	1 (1)	5 (3)	8 (6)	9 (5) (10)	11 (7) (11)	16 (9) (16)	21 (12) (21)	
	後期								
計		2 (1) (2)	16 (5) (15)	36 (14) (31)	48 (19) (40)	47 (21) (39)	51 (19) (45)	77 (33) (77)	45 (19) (37)

(注) < >内は女子学生数で、()内は外国人学生数。いずれも内数で示す。

なされているとのことであり、近々「イスパニア語学科」も増設の予定と聞いている。

なお、カリキュラムで興味深いのは、教官や大学院・学部学生、研究生を対象とした、いわばキャンパス全体に開かれた授業として「特別研修コース」や「特殊講義」が開設されている点であろうか。たとえば、ドイツ語圏に出張するため改めてドイツ語を学ぶ必要が生じたときは、教官でも(ノ)この特別研修コースで入門から上級まで3名のドイツ人教師による授業、あるいは日本人教師による講読や文法の授業から選択して学ぶことができる。但し、受講生を比較的少数に限定しているためか、Placement Testや面接がある。一教師も受けねばならないんでしょうか？ このコースは、全体としてかなりな開設科目があり、たとえば英語では1987年度後期で、初級5コース、中級6コース、上級4コースが開かれ、定員が初・中級で各24名、上級で各12名となっている。このコースが、主としてコミュニケーション能力の養成を目的としているのに対して、特殊講義では言語や言語文化に関する専門的研究が取り上



<音声実験室>

げられ、これも1987年度では、実験音声学や映像工学、コンピューターによる言語処理に関する科目とならんで、文学理論やルネサンスの詩学に関する科目など全体で10科目が開設されている。したがって、遠い将来のことかも知れないが、工学部の学生で、文学理論に関心を抱いている者が、教育学部の学生で、やはり文学理論に関心を抱いている者と協力して、映像という工学的手法を用いて、そのテーマに関する教育プログラムをコンピューター作成するとい

うことも、あって不思議はないということになる。一将来、文学理論が変貌しないという保証はなからう。これが非現実的な夢想でなく、現実のこととなれば面白いと思う。

さて、学問領域がこのようにクロス・オーバーするのが一お題目ではなく一当然となってしまう頃には、本学も、研究・教育内容だけではなく、組織も改編をせまられることにでもなるだろうか？

私説『視覚映像文化論』

(その2：黒沢明『生きる』とポルトガル異端審問制度・火刑式)

ポルトガル・ブラジル語学科 林 田 雅 至

●僕が一番最近『生きる』(1952年 143分)を観たのは、1985年3月22日(金)東京銀座にある名画座の老舗の一つ並木座であった。日記を見ると、開演10分前の午前10:15既に50名ほどの列が出来ていて、『生きる』の第1回上映(10:30)が始まる頃館内は超満員となっている。因に料金は600円である。フランスから贈られたレジオン・ドヌール・オフィシエ勲章を記念して84年10月下旬に打たれた、周五郎原作『赤ひげ』の興行を受ける形で組まれた監督作品特集(1985. 2. 27-4. 2)の一環として『醜聞(スキヤングル)』(1950)一当時、journalismが報道の自由を濫用して、個人のprivateな生活の内部にまで土足で入りこみ、あることないことを書きたてる風潮があった。そういう風潮に腹を立てた黒沢が、スキヤングルに巻き込まれた新進気鋭の画家と有名な美人歌手の周辺を、老弁護士の悲哀を織りまぜて描いてみせた、現今のphotojournalismが引き起こしている社会問題にも一脈通じるところのある話題作。とにかく歌手を演じた山口淑子は正に《窈窕の淑女》の名に相応しい美貌であった一と抱き合わせ、2本立てで、3. 20-3. 26の期間上映されていた●ある都市の市役所に30年間無欠勤の、何のとりえもない市民課長・渡辺勤治(志村喬)が初めて役所を休んだ。その日、彼は病院で胃癌のため半年の生命を宣告されたのである。茫然自失のうちに帰宅してみると、息子夫婦が、父である自分の退職金を担保に別居しようと相談をしている最中であった。5歳の時

に母を亡くし、男手一つで育ててきた息子の体たらくぶりに呆れ返り、愕然として、どうしようもない絶望感に襲われた彼は、夜の街中を彷徨・徘徊し、永年の貯金を使い果たして、したたかに酔い潰れてしまう。翌朝、辞職届の判をもらいたいという同じ課の女事務員・小田切とよ(小田切みき)と会った彼は、あんな退屈なところには死にそうでいられないと告白されて、初めて自らがこれまで何事につけても事なかれ主義で何もしなかったことを思い知らされる。家族関係にすっかり嫌気を差している老吏員は、余命幾許もない身の上を冷静に受け止め、どうせ死ぬ身だ、残された時間を生命の限り生きたいと積極的に人生に取り組もうとし、私生活ではなく公的生活に人生の意義を見出そうとする。以降、渡辺勤治は仕事場でその目の色が変わっていた。たらい回しの憂き目に会っていた暗渠埋立陳情書に判をつく。悪の癪であった所に児童公園ができ、その地を特飲街にしようと目論んでいた暗黒街のボスどもが脅迫に現われるが、無感覚に受け止める彼の態度は微動だにしない。新しく開園した夜更けの児童公園。一人、ブランコに身を揺らしながら、命短し、恋せよ乙女…を歌う男・渡辺勤治の姿が雪の舞う漆黒の暗闇に浮かぶ。雪の翌朝、満ち足りた明るい色を湛えた死に顔の彼が、静かに身を横たえている●『生きる』というと、判で押したように、イメージとして、夜更けの児童公園でブランコに乗る主人公が、僕たちには浮かび上がってくる。映画のポスターに

も、パンフレット等にも、必ずそのシーンが使用されているせいでもあろう。勿論、内容の点から、それは言えることである。生命力に乏しく、無気力だった嘗ての老主人公が心機一転して、活力に溢れた仕事ぶりを披露し始め、内的なクライマックスに達した時、それは児童公園の完成であり、同時に生命の完全燃焼を果たした末の悲しきかな、しかし真摯で荘厳な彼の死であった。その一場面に象徴的に映画の内容のすべてが凝縮されていると言っても過言ではないだろう。それはそれとしておいて、僕はこの場面を《クライマックス》という言葉で捉えているわけだが、気分の高揚の後には下降しかないわけであり、そういう意味で、この場面を何度となく見る度に決まって下向きのベクトルが、従ってマイナスのイメージが僕の頭の中で支配的になるのである。そしてもう少し自己を冷静に客観的に分析してみると、主人公の死を悼むための悲しみ・哀れみという即反動的な感情の他に、無意識裡に一般論として人生に対する一種の pessimism にまで極端に敷衍してしまっている自己の姿に気がつくのである ●僕にとって、この作品の中でこの場面より印象的なシーンがある。女事務員・小田切とよの、役所に関する正直な内部告発が、生命の危機感・愛する息子の裏切り行為と二重に苦悩する主人公の内的な覚醒の重要な引き金になるのだけれども、それはあくまでも下降ラインを描いていた生命曲線をそれ以上さらに下がらないようにするための歯止めの役割を果たしているに過ぎないのであり、上昇曲線を描くような動機付けとなったのは、小田切とよが持つ潑刺とした若さへの羨望の念が変容した彼の彼女に対するあまりにも純粋な淡き恋心に他ならない。それは俗世間で言い古され手垢の付いた言葉《老いらくの恋》という範疇で捉えられるものではない。しかしこの上昇曲線が即座に現場での労働意欲には結び付いていかない。果たせぬかな彼の恋が現実化し、成就することはないのである。最後の逢瀬となる豪華な喫茶店で2人間の会話は重苦しく粘付いたもので、routine化した逢瀬にうんざりしてしまったりと歎く彼女はもう話すことは何もないとつれなく対応するだけである。彼がどうしたらその潑刺さが得られるのかと尋ねると、彼女は暫く考えてから潑刺さの原点は労働の喜びであると答える。彼女に魅せられた老主人公は躊躇しながらも、職場の仕事への再挑戦を固く心

に誓うのである。単純に失恋の絶望感に襲われるのではなく、恋心にまで進んでいた情愛を彼女に対する若さへの羨望の念に謙虚にも再度後退させ、空白になった恋心の領域を労働の喜びで埋め合わせようと蘇生したつもりで一喫茶店の洒落た宴会席で催されていた大学生グループの birthday party [本来年に1度の華やかなる再生の儀式である以上] が見事に象徴しているように一真剣に妄執に取り憑かれたように働き始める。彼の心象にはこういう経過・推移が認められると僕は思う。彼の気持ちの中には精神的に彼女に一体となろうとする思いは隠せない。そこには主人公の若き乙女への極めて人間的な未練を読み取ることが可能である。何とも慎しやかな恋愛感情であろうか。この混じり気のない愛情の初期の徴候を如実に物語る場面を見てみよう。彼は愛情表現として、彼女の破れたストッキングを見て憐れみ、新品のそれを買って与える。彼女は喜び勇んで雀躍りし洋品店を飛び出して、バスの往來する道路を縫うように機敏に道路中央にまで進み、2台のバスが逆方向に走り去るのを待っている。彼女の身を案じる主人公は、道路中央に立ち止まっている彼女の許に走り寄り、彼女を諫めるが、有頂天の彼女はその言葉には耳を貸さず、このストッキングを買うためには3ヵ月間お弁当を目刺で辛抱しなくてはならぬと素朴に嬉しさを表現している。実は、このシーンが、僕にとっての印象に残るそれなのである。向こう側に走り去るバスは象徴的にそれまでの彼の一切の鈍重な生気のない詰まらない過去を運び去り、こちら

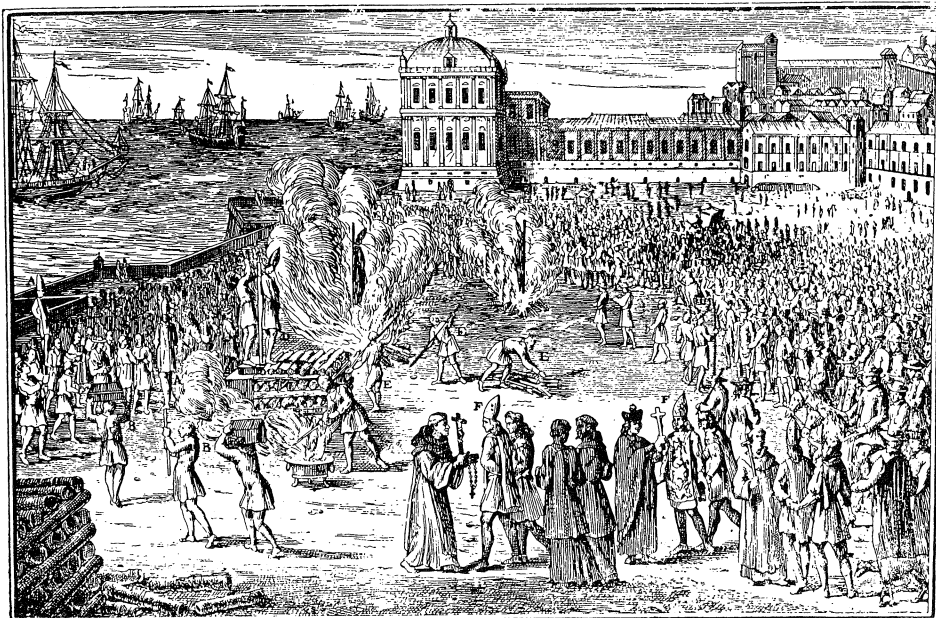


側に走り来るバスは、胃癌宣告・金の亡者=息子というマイナス・イメージを背負いながらも、これから短期間とは言え展開するであろう一抹の希望に満ちた未来を運んで来るのである●この場面の構図の中で、走り去るバス・走り来るバスと確かに反対方向ではあるが、彼女を中心点とする右回りの円運動を想定することは可能であろうと思われる。そして、水平方向の直径線上に主人公は中心点に向かって登場することになる。円は中心を通る直線・直径で左右対称形をなしているバランスのとれた安定感のある図形である。言葉の観点からも、円はプラスのイメージを僕たちに与えてくれる。円滑・円熟・円満がそうであり、円相は禅宗で悟りの対象として描く円圏であり、円転滑脱は止を刺す四字成句であろう。円は僕たちに柔和であり安定感のあるイメージを連想させると同時にそれが static なものとしてではなく、極めて dynamic なものとして立ち現われてくるのである。流動する stabilityこそ円の本質であろう。図形が有する形式的なイメージと言葉が内包する言語的なイメージが二枚岩となって、胃癌宣告・息子の金の亡者ぶりの露見によって益々深刻化し、女事務員の無邪気な告白によって主人公の意識の表面にはっきりと浮上した、／鈍重さ・生気のなさ・無気力／を特徴とする静的な心的不安定性を／機敏性・潑刺さ・気力の充実／を特徴とする動的な心的安定性に変貌させ、切り替えていく主人公の人生における分岐点・転回点を visual にまた implicit-linguistic に表現している。そして老吏員にとって正に《コペルニクス的転回》となった人生の円運動の機軸に立つのは誰であろう他でもない、彼に愛情を inspire した小田切とよその人であった。僕は前の場面の分析で用いた《クライマックス》という言葉で踏まえて、この場面を下向きの《クライマックス》で捉えてみようと思う。つまり、先の場合とは逆に、気分の上昇・意気消沈の後には上昇・高揚しかないわけであり、そういう意味で、上向きのベクトルが、従ってプラスのイメージが僕を捕えて放さない。主人公の人生の転回点に拍手喝采を心から送りたいという即反動的な感情の他に、一般論として人生に対する一種の optimism にまで敷衍してしまっている自らの姿を見出すのである。作品全体の構造的な解釈からすれば、それぞれにマイナス・プラス・イメージを持つ両場面を対位的に symmetric なうちに、また

ICON AND IDEA (The Function of Art in the Development of Human Consciousness), Harvard Univ. Press, 1956. の著者である Herbert Read の指摘する通り、symmetry が a priori に蔵する美意識も感じながら、捉えなくてはならないのであろう。僕が後者の場面により傾きを示すのは僕の主観に関わる問題であると思われるが、ここでは僕の主観の問題にはこれ以上立ち入らないことにする●ところで、円に対するイメージは universal は性格を持つのであろうか。次に下の版画を使って論を展開してみよう。図版は Inquisição 異端審問制度 (1536-1821) によって行なわれる宗教裁判後の火刑式を表わしている。Terreiro do Paço (宮殿広場) で式は執行されている。図の奥に横たわる建物は Paços da Ribeira (河岸宮殿)。左に流れているのは Tejo 川である。ここは現在通称 Comércio 広場と呼ばれ、市電・バスがひっきりなしに往来する Lisboa で交通量の最も多い区域の一つである。異端審問制度は言うまでもなく宗教的機関であり、カトリック信仰をできるだけ純粋に維持することに尽力し、公然たる背教・異端のみならず、信仰から逸脱する疑いに対しても弾圧を加えた。そのため異端の疑いは教義や、天文学・気象学・生物学・医学の多様な領域に及ぶ自然学 (filosofia natural) から哲学・文学に至るまで向けられた。ただ、ポルトガルではユダヤ人排斥が経済的動機付けから制度の主眼となった。16世紀後半以降3度に亘って (1552年・1613年・1640年) 公にされた規約 (regimento) によると、その裁判の特徴は告発は全て受理され、密告も認められていた。被告は監禁の理由、告発者の名前、告発された犯罪の場所・目的も知らされなかった。また、被告人は弁護人も弁護士も選ぶ権利を与えられなかった。ともかく恐ろしいほどに徹底して秘密主義が守られたのである。火刑式は285年間で760回を数え、犠牲者は約1,800人に上る。一方、商業活動に比類ない才能を発揮するユダヤ人商人・資本家・高利貸しに国民全体が一様に抱く憎悪感情を払拭する、つまり国民に鬱積する憂さを晴らす死の祝祭空間であったと言える●制度をもう少し歴史的に diachronic な枠組の中で捉えておこう。大航海時代の幕開けとして始まる15世紀の海外進出以来、1820年の自由主義革命とそれに続く30年代の改革に至るまで、ポルトガルは、聖職者・貴族・平民という厳格な身分制社会 ancien regime (旧体制)

を敷いている。異端審問制度はその時期に設立したのであるが、この制度はポルトガルの精神史を理解する上で極めて重要なキーになる。1536年ローマ教皇から実質的に買収され、認可を得たこの制度設立の真の動機は政治的・経済的なものであった。十字軍の申し子として、Reconquista (国土回復運動) の結果、13世紀末領土的・国民的統一を成し遂げた建国当初から王権による中央集権化が図られる。João II (在位 1481—95) 統治下、貴族階級から領主裁判権制度が剝奪され (1481年)、また最大の封建貴族 Bragança 公 (1430—83)・Viseu 公 (1461頃—84) がそれぞれ殺害されることによって (1483—1484年)、地方分権の極限状況・封建社会とは決定的に袂を分かつことになる。絶対王制の確立期次代国王 Manuel I (在位1495—1521) 治世は正に我が世の春を謳歌するものの、海外交易に要する巨額の費用のために生じた、フランドル・カスティリア金融市場での莫大な借金が早くも国家財政を圧迫し始める〔平たく言えば、サラ金経済で自らの首を締めたのである〕。国王による交易独占体制・国家資本主義は次の João III (在位1521—57) の折に脆くも破綻をきたしてしまう。その結果、経済的・社会活動を行なう資本家ユダヤ人の財産が狙われることになる。キリスト教徒でないことを理由に制度は彼らから全財産を没収し、

国外追放を宗教裁判の上で司法的に合法に強要することになる。こうして異端審問制度はスタートした。勿論王権の中央集権化を推進する政治的役割も十分に果たしたと言える。医学を要とする科学の萌芽を大幅に遅らせたのもこの制度である。18世紀後半フランス啓蒙思潮の影響を受けた、ユダヤ人であるがために外国での亡命生活を強いられ、ロシアでは Ivan Antonovič (在位1740—41) 治世の宮廷侍医を務め、パリで主著 *Método para Aprender a Estudar a Medicina* (『医学方法序説』、1763) を発行することに成功した Ribeiro Sanches (1699—1782)・制度検閲のために税関で差し押え処分を受けた Verdadeiro Método de Estudar (『学問の真の方法論』、ナポリ、1746) の著者 Luís António Verney (1713—92) らの啓蒙主義的活動によって臨床医学のための解剖学実験室 (Teatro Anatómico) が1772年 Coimbra 大学に創設される。時代は変革期を迎え、1821年制度が全廃され、ポルトガルはようやくにして近代化の道を歩み始めることになる ●さて本論に入るが、図版の奥にある半円ドームの建物の中心を通る垂直線を下に下ろしてくるとその線上に、相当に細長い火掻き棒を両手で持つ火刑式の薪係りのような刑吏と、火刑に処される被告人に最後の説教を施す、左手に rosário (数珠) を掲げ、右手には Cristo 磔刑の浮彫像



〈リスボンのアウト・デ・フェ (auto de fé) 火刑式

17世紀末(ピーター・ファンデル・ア編『スペイン・ポルトガル事情』ライデン、1907年)〉

がはっきりと見える十字架を翳す剃髪僧が縦に並んでいる。そしてこの刑吏を中心点にして、火刑式の現場を取り囲む群衆はほぼ円を描いていると見ることができよう。構図の上では、建物の中心線／刑吏／剃髪僧のラインはそれを直径として、見事に左右対称形をなしている。被告人は次々に右回りで移動している。死に至る道のりである。仮にこの円の構図が象徴的に安定性を表象しているとすれば、内容的にはどういう意味での安定性なのであろうか。政治的に王権の安定性を表わしているのではあろうか。あるいは、既に触れたように、一面ではこの儀式の意味するところは、キリスト教徒が所詮太刀打ちできないユダヤ人商人・資本家・高利貸しに対して抱く憎悪感情を払拭する、つまり国民に鬱積する経済的な憂さを晴らし、安堵感＝精神的な安定感を得るための《生贄の祝祭空間》であるのだから、そういう意味での安定性を symbolize するものであろうか。ユダヤ人の側からすれば、彼らの日常生活を脅かし、

あらゆる意味での不安定性を招来することになる死刑執行式であり、不条理な焚殺刑そのものであろう。実際、制度設立以降、国内在住者は Lisboa の一角で自己防衛の手段として ghetto (asilos=逃避邑(逃れの里) cf. 女性を擁護する特権を有した中世日本の縁切寺の制度は文化的には等価値の社会的機能を果たしたと言える)を形成していくことになる。Comércio 広場に隣接して拡がる現在の Alfama (アラビア語で、asilos の意) 地区がそうである。どうやら今の所そう簡単に結論は出そうにもない。円のイメージの普遍妥当性についてはもう少しじっくりと考えてみようと思う ●最後に、現代ポルトガルの文化的衰退の原因を異端審問制度による宗教的な意味での血の純粹化に求める考え方もあることを述べておこう。何百年と続いたキリスト教一色の純粹種の文化は他からの刺激がなく、活性化されないがために沈滞の方向をたどらざるを得ないと見るのである ●1987年12月25日・Natal (Cristo降誕祭) に記す ●

〈出版 物 案 内〉

★スライド目録—ルーマニア編—……伊藤 太吾
 ★視聴覚外国語教育研究 第10号
 発話行為の相互学習における視覚・視聴覚機器の利用……A.サンニコヴァ・訳 小野理恵
 言語行動としての翻訳
 —“Max und Moritz” のコメントの場合—
 ……乙政 潤

スウェーデン語音声教材の作成……福居 誠二
 日本語の遊離数量詞の談話機能について
 ……大木 充
 ルーマニア紀行(その2)……伊藤 太吾
 初心者のテキサス、1984～1986年
 ……藤元(香川) 優子

||||||| 編 集 後 記 |||||

⊕ Audio Visual Journal 第13号をお届けします。毎年、LL恒例の行事となった第4回外国人教師による座談会の記事を集めました。今回は、外国語を教えるのにまず、文法が大切か、それ以外の部分が大切かといった議論が白熱化し、時間が足りなくなって残念でした。
 ⊕ このジャーナルが発行される頃には、「海外放送受信システム」も完成していて、アメリカ、中国、

ソヴィエトの海外放送の他、国内の衛星放送も受信が出来るようになります。4月からは海外のリアルタイムな映像資料(文字や音声の何百倍もの情報量を有する)の利用により、外国語専門教育効果が飛躍的に高まることが期待されます。6mのパラボラ・アンテナは外大の名物になるかも知れません。

A V Journal 一第13号一

1988年3月28日発行

編集 大阪外国語大学視聴覚教育委員会
附属図書館視聴覚資料係
発行 大阪外国語大学
印刷 (株) ムラタ印刷